

# 父の墓

田山花袋

青空文庫



ステーション  
停車場から町の入口まで半里位ある。堤防になつてゐる二間幅の路には、櫺の大きな並木が涼しい蔭をつくつて居て、車夫のまんぢうがさ其間を縫つて走つて行く。小石が出て居るので、車がガタガタ鳴つた。

堤防の下には、処々茅葺屋根が見える。汚ない水たまりがあつて、其処に白く塵埃に塗れた茅や薄が生えて居る。日影のキラキラする夏の午後の空に、起伏した山の皺が明かに印せられた。

堤防の尽きた処から、路はだらだらと下りて、汚ない田舎町に入つて行く。

路の角に車夫が五六人、木蔭を選んで客待をして居た。其そののかたはらの傍わらに小さな宮があつて、其その広場で、子供が集つて独樂を廻して居た。

思ひも懸けぬ細い路が、更に思ひもかけぬ汚い狭い衰へた町を前に展ひろげた。溝の日に乾く臭と物の腐る臭と沈滞した埃の交つた空気にほひの臭すさまとが凄しく鼻を衝ついた。理髮肆の男の白い衣ころもは汚れて居るし、小間物屋の檐のきは傾いて居るし、二階屋の硝子窓は塵埃ほこりに白くなつて居るし、肴屋さかなやの番台は青く汚くなつて居るし、古着屋の店には、古着、古足袋、古シャツ、古ツボンなどが一面に並べであるし、何処どこを見ても衰へおとろの感じのしないものはなかつた。

とある道の角に、三十位の卑ぐらゐしい女が、色の褪さめた赤い腰巻を

捲つて、男と立つて話をして居た。其処に細い巷路があつた。洗濯物が一面に干してあつた。

『肥後の八代とも言はれる町が、まさかこんなでもあるまい。此処は裏町か何かで、賑かな大通は別にあるだらう』と私は思つた。成程、少し行くと、通がいくらか綺麗になつた。十字に交叉した路を右に折れると、やがて私の選んだ旅店の前に車夫は梶棒を下した。

私の通された室は、奥の風通しの好い二階であつた。八畳の座敷に六畳の副室があつた。衣桁には手拭が一筋風に吹かれて、拙い山水の幅が床の間に懸けられてあつた。座敷からすぐ瓦屋根に続いて、縁側も欄干もない。古い崩れがけた黒塀が隣とのし

きりをしては居るが、隣の庭にある百日紅は丁度此方の庭木であるかのやうに鮮かにすぐ眼の前に咲いて居る。

そして其向ふに、同じづくりの二階屋がずらりと幾軒も並んで、其の裏を見せて居る。二階屋の裏！ 其処には蚊帳が釣つたまゝになつて居る家もあつた。雨戸が半ば明けられて、昨夜吊つたまゝの盆燈籠が其軒に下げてある家もあつた。雨戸の全く閉め切つてある家もあつた。箆筒、葛籠、長持、机などが見えた。不図、其の中の一軒から、艶かしい女が、白い脛を見せて、今時分ガラガラと雨戸を繰り出した。

茶を運んで出た女に、

『向ふの二階屋の表面は大通りになつて居るのかね？』

『さうだツけん』と女は笑つた。

其その二階屋の表とほりの通わたしを私ゆふめしは夕餐のちの後に通つて見た。其そこ処このが此田

舎町おほどほりの大おほどほり通やほりで——矢張狭かつた——西洋小間物店みせ、葉茶屋はぢやや、

呉服商、絵葉書屋などが並んで居ゐた。孰いづれも古い家屋かそくばかりで、

此こゝ処らあたりの田舎町の特色ががよく出でて居ゐた。町の中央に、芝居

小屋があつて、青い白い幟のぼりが幾いくほん本となく風にヒラヒラして居ゐた。

わたし

私の想像は二十年ぜん前わたしの私わたしの故郷わらぶきの藁葺の田舎家やに私わたしを連れて

行つた。

母親は筒袖つゝそでを着きて、いざり機ばたをチヤンカラチヤンカラ織をつて

居ゐた。大名縞だいめうじまが梭おさの動たびく度に少しづゝ織をられて行く。裏には栗

の樹きが深い蔭かげをつくつて、涼しい風を絶えず一室しつに送つて来る。壁に張つてある煤すすけた西南戦争の錦絵にしきゑを私わたしは子供心こどもごころによく覚えて居ゐた。

『肥後八代横手村』

母親はよく其村そののことを話した。四ツ切の大きな写真が箆筒たんすの底しまに蔵しまつてあつた。墓かみがいくつとなく並んで居ゐる写真であつた。其墓そのの一つを母親が指ゆびさして『これがお前の父おとつさんのお墓かみだよ。父おとつさんは此処こゝに居ゐるんだよ。成長おほきくなつたら、行つて御覧？』

またある時は、

『生きて居ゐるなら、何どんなに遠くつても、お金を持もつて、訪ねて行くけれど、お墓になつて居ゐてはねえ！』

母親の眼からは涙が流れた。その時に限らず、母親の膝を枕に、  
 私は其わたしの父親の話——御国みくにの為ために戦死した豪えらい父親の話を聞いて居ゐると、いつも私の頬わたしほに冷ひやたいものゝ落ちるのが例れいであつた。  
 母親は其話そのをしては泣かすには居ゐられなかつた。

姉は其頃その十五六で、

『お前まへなぞは男おとこだから、成長おほきくなつたら、いくらでもお墓参まほりが出来るけれど、私わたしなどは女めだから、ねえ母おつかさん。……でも、一生いっせいに一度はお参りまゐりたい！』

私は子供心わたくしこどもごころに、父親の事を考へた。国くにの為ために死んだ豪えらい父親！ 其墓そののある処ところはどんな処ところだらうと思つた。

故郷こきやうの藁葺家わらぶきやと、汚きたない八畳の間と、裏うらの栗くりの樹きと、真黒まぐらに

なつてヤンマ取りに夢中になつて居る八歳の子供と——其子供が別の子供のやうに眼の前を通つた。

後送された父親の遺留品の中に、手帳が一冊あつた。

成長おほきくなつてから、私は幾度も其手帳を見たことがある。

普通の革の手帳で、鉛筆が一本挿してあつた、中には日記がつけてあつた。

其日記そのを私わたしは覚えて居る——

四月十日

昨夜長崎より船にて上陸す。

賊軍少々抵抗したれど、忽たちまちにして退散す。氣候暖かし。晴はれ。

十一日

八代ししろにて昼食ちゆうじき。士民官軍を喜び迎ふ。

甲佐方面かふさに賊軍本営を置くとの説あり。

菜の花既に盛さかりを過ぐ。

十二日曇くもり

進軍

十三日晴はれ

十四日晴はれ

これで跡は白くなつてゐる。十四日の午後、御船附近みふねの戦争で、父親は胸に弾丸たまを受けて、死屍しゝとなつて野に横よこたはつたのである。

十四日晴はれ——と書いて、後あとが何も書いてないといふことが少なからず人々を悲かなませた。私わたしも悲しかつた。

わたしは今年三十八である。父親が海をこえてこの遠い九州の野に  
 来た年齢は殆ど同じである。私は二十年前、死ぬ四日前に此処に  
 来た父親の心を考へずには居られなかつた。

子の眼に映つた田舎町が其当時父の眼に映つた田舎町とさう大  
 して違ひはないといふことは、古い家並、古い通、古い空氣が明  
 かにそれを証拠立てゝ居る。父も家庭に対する苦み、妻子に対す  
 る苦み、社会に対する苦しみ——所謂中年の苦痛を抱いて、  
 其時此の狭い汚い町を通つたに相違ない。世の係累を暫し戦ひの  
 巷に遁れやうとしたか、それともまだ妻子の爲めに成功の道を求  
 めやうとしたか、それは何方であるか解らぬが、兎に角自から進  
 んで此地に遣つて来たことは事實である。私は官軍の服を着けた

将校兵士が、隊を為し列を作つて此の狭い田舎町を通過した折りのさまを描いて見た。

其夜は征西將軍の宮の大祭で、町は賑かであつた。街頭をぞろぞろと人が通つた。花火が勇ましい音を立てゝあがると、人々が皆な足を留めて振り返つた。

郵便局の角から入ると、それから二三町の間は露店のランプの油烟が、むせるほどに一杯に籠つて、往きちがふ人の肩と肩とが触れ合つた。田舎のお祭によく見るやうな見せ物——豹、大鱧、のぞき機関、活動写真、番台の上の男は声を嗔して客を呼んで居る。旅行用の枕を大負けに負けて売つてるものの隣りに、不思

議あたに中る人相見にんさうみの洋服の男がゐて、その周囲を取巻いて、人が  
 黒山のやうにたかつて居ゐる。をりく、摩すれちが違ふ娘の顔は白かつた。  
 雑踏した長い馬場ばばを通り越すと、夜目にもそれと知らるゝ蓮池  
 があつて、夏の夜風が白い赤い花と広葉ひろばとを吹動ふきうごかした。其奥その  
 には社殿の燈とうみやう明——私わたしは其一生を征旅せいりよの中に送つて、この  
 辺土へんどに墓となつた征西せいし將軍宮しやうぐんのみやの事蹟じせきを考へて黯然あんぜんとした。  
 そして其昔そのと今のこの祭の雑踏とを比べて考へて見た。

頭上には星がキラ／＼光つた。

帰りには裏道かよを通つた。露店の尽頭はづれに、石鱈いしがらを五個六個並べて、  
 大きな声で、

『買はんか、買はんか、これでも買はんか』

と怒鳴つて居る爺さんがあつた。其の権幕が恐ろしいので、人々は傍にも寄りつかずにさつさと避けて通つた。

『買はんか、買はんか、これでもか、これでも買はんか』  
露店の上の石鹼が皆跳り上つた。

翌日、暑くならぬ中にと思つて、朝飯をすますとすぐ、私は横手村に行つた。

『墓地の鍵を預つて居る男がある筈ですから、其処に行つて聞いて御覧なさい』と旅館の主人が教へて呉れた。

横手村と謂つても、町とは人家続きになつて居て、十町と隔つては居なかつた。其近所と思はれる処に行くと、野菜の車を曳

いて、向ふから男が遣つて来る。

『官軍の墓地は何の辺になりませうか』

と訊くと、

『官軍の墓地？ 何ですか、それは！』

と要領を得ぬ答である。

これこれと説明して聞かせると、それならこの向ふにあるのがそれだらうとのことである。

私は裏道に廻つて見た。此処はつい此間まで元の停車場

場うのあつた処で、柵などがまだ依然として残つて居た。片側は

人家がつゞいてゐるが、向ふは田畝になつて了ふので、私はまたある家に立寄つて聞くと、このすぐ向ふだといふ。

成程なるほど、墓地らしいものが田なかの中にあつた。周囲に柵めぐが繞めぐらしてある。

それを少し離れて、二三軒げんの瓦屋根があつて、それに朝日がさした。小さい工場こうばの烟筒えんとつからは、細い煙が登つて居ゐる。向ふの街道には車の通る音が絶えず聞える。

田圃道たんぼみちにはまだ朝の露が残つて居ゐた。私の足袋はしとどに濡れた。辛からうじて、瓦屋根の、同じ門のつくりの、鉄道の役員の官舎らしい家いへの前まへに来ると、其処そこの傍そばに車井戸があつて、肥つた下女が朝日を受けて、井戸の鏈くさりを音高く繰くつて居ゐた。私は今一度訊どたぶねて見た。其下婢そのかひも矢張鍵やはりを預あづかつて居ゐる家うちを知らなかつた。けれど態わざ々／＼家いへに入つて聞いて呉くれたので漸やうやく解わかつた。

鍵を預つて居る人は、前の街道を一二町行つた処の、鍛冶屋の隣の饅頭屋であつた。場末の町によく見るやうな家の構で、せいろの中の田舎饅頭からは湯気が立つて居る。上さんは手拭を被つてせつせと働いて居た。

朴訥な人の好きさうな老爺が、大きな鍵を持つて私の前に立つた。私は線香と花を買つた。

一歩毎に老爺の持つた鍵がぢやらぢやらと鳴る。

今度は正面から入つた。

街道の傍に『官軍改修墓地』といふ木標が立つてゐたが、風雨に曝されて字も読めぬ位に古びてゐた。石の橋の上には、刈つた藪が並べて干してあつて、それから墓地の柵までの間は、笠

のやうな老松らうしようが両側から蔽おほひかゝつた。

老爺おやぢは門の鍵を開けた。

幼い頃見た写真がすぐ思おもひだ出された。けれど想像とは丸まるで違つてゐた。野梅やばいの若木が二三本処ほんところ々くに立つて居ゐるばかり、他に樹木とてはないので、何なんだか墓のやうな気がしなかつた。夏の日てらに照てらされて、墓地の土は白く乾いて、どんな微かすかな風にもすぐ埃ちりが立ちさうである。私わたしの記憶も矢張やはりこの白い土のやうに乾いて居ゐた。

数多い墓うちの中から、漸やうやく父の墓をさがし出して其前そのに立つた。

墓は小さな石で、表面に姓名、裏に戦死した年月日ねんぐわつひと場所とが

刻んであつた。

『分りましたかな』

一緒に探して呉れた老爺は私の傍に遣つて来た。

『お参りに来る人がそれでも随分あるだらうねえ?』かう私が訊くと、

『え、時には御座いますがな。たんとはありません。皆な遠いで御座いますから……。』

『お前さん、余程前から、番人をして居るのかね?』

『お墓が出来た時からかうして番人を致して居ります』

と爺は言つて、『何うも一人で何も彼も致すで、草がちきに生えて困りますばい。二三日鎌さ入れねえとかうでがんですばい』と、

傍そばに青くなつた草を指ゆびさした。

四月の十四日——父の命日には、年々床の間に父の名の入つた石いしずり摺すりの大きな幅ふくをかけて、机の上に位牌ゐざんと御膳おぜんを据ゑて、お祭をした。其頃そのいつも八重さくらが盛りさかりで、兄はその爛らんまんたる花はなに山吹やまぶきをふたえだ二枝ほど交まぜて瓶かめにさして供へた。伯母おばは其日そのは屹き度ど笥けの土産こみやげに持もつて来た。長い年としつき月つき——さうして過とした長い年としつき月つきを、此墓守このの爺ぢやうは、一人さびしく草を除とつて掃除として居ゐたのだ。

私わたしは墓はかの前にひざまづ跪ひざまづいた。

一人息子であつた父の戦死を嘆いた祖父母も死んだ。夫に死な

れた為めに、険しいさびしい性格になつて常に家庭の悲劇を起した母も死んだ。難かしい母親の犠牲になつた兄も死んだ。

弾丸を胸部に受けて、野に横つた父の苦痛と、長い悲しい淋しい生活を続けた母の苦痛と、家庭の悲惨な犠牲になつて青年の希望も勇氣も消磨しつくして了つた兄の苦痛と——人生は唯長い苦痛の無意味の連続ではないか。

私は父の戦死から生じた総ての苦痛を味つて来た。絶望が絶望に続き、苦痛が苦痛に続いた。その絶望と苦痛の中で、私は人の夫となり、人の親となつた。総領の男の児は、丁度今私が父に死別れた時の年齢と同じである。

私は父親のことよりも、自分と妻と児のことを考へた。過去よ

りも現在が烈しく頭を衝いた。

『人間はかうして生存して居るのだ。かうして現在から現在を趁つて、無意味の中に生れて、生きて、で、そして死んで行くのだ』

『平凡なる事実だ。言ふを待たざることだけれど、事実だ』

私はジツとして墓の前に立つて居た。

いろいろな顔や、いろいろな舞台が早く眼の前を過ぎた。父の

若かつた時のことから、自分の兎の死ぬ時までのことが直線をして見えるやうに思はれる。死は死と重なり、恋は恋と重なり、

苦痛は苦痛と重なり、墓は墓と重なり、そして人生は無窮に続く。

私は四辺を眺めた。かうした長い連続を積上げて行く一日一日

のいかに平凡に、いかに穏かであるかを思つた。日影は暑くなり

出した。山には朝の薄い靄もやが靡なびいて、複雑した影を襲ひたごとにつくつた。青い田と田の間あひだちの小さい蓮池には紅白の花が咲いた。

墓を去つて、笠松かさまつの間あひだみちの路を街道に出やうとしたのは、それ

から十分ほど経つてからのことであつた。何なんだか去るに忍びない

やうな気がした。かうした思おもひを取集めて考へることは、一生しやちうい中幾

度くどもないやうにさへ思はれた。人間は唯たゞ※忙そうばううちの中に過ゆぎて行く：

：味あぢはつて居ゐる余裕あぢはすらないと又繰返した。

松は濃い影を地上に曳いた。田の境の溝どぶには藷ゐがツンツン出て、

雑草が網のやうに茂つてゐた。見て居ゐると街道には車くるまが通る、馬

が通る、児こをたゞ負おんぶした田舎いんかの上かみさんが通る、脚絆きやはん甲かかけの

旅人が通る。鍛冶屋かぢやの男おとこが重い鉄槌てつちに力をこめて、カンカンと

赤い火花をとほり通に散らして居ゐると、其その隣となりには建たて前まへをしたばかりの屋根の上に大工が二三人頻しきりに釘うちつを打附けて居ゐた。



# 青空文庫情報

底本：「ふるさと文学館 第五〇巻 【熊本】」ぎょうせい

1993（平成5）年9月15日初版発行

底本の親本：「趣味 第4巻4号」易風社

1909（明治42）年

初出：「趣味 第4巻4号」易風社

1909（明治42）年

入力：林田清明

校正：鈴木厚司

2010年3月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアのみみなさんです。

# 父の墓

田山花袋

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>